

目の化粧と化粧態度が顔錯視に与える影響

今藤 咲智

従来、アイメイクが如何にして目を大きく見せるのかというテーマで、マスカラやアイラインなど様々なメイク法に関して化粧錯視に関する研究が行われてきた。本研究は、(a)実験参加者の化粧に関するこだわりが錯視量に及ぼす影響と、(b)化粧錯視にまつわる幾何学的錯視の厳密なメカニズムについて明らかにすることを目的に3つの実験を行った。

実験Ⅰでは、化粧に対するこだわりが強い人は錯視量が大きくなる、という仮説を検証した。そのためにまず、マスカラとアイラインを系統的に操作した顔画像を標準刺激、ノーメイク顔画像の目の大きさを变化させた画像を比較刺激とし、目の大きさがどの程度大きく見えるか錯視量を測定した。次いで、化粧に対するこだわりを質問紙で調べた。するとすべての化粧顔画像において目の過大視が認められた。さらに、錯視量の大きい人は化粧研究にコストを費やしていること（つまりこだわりが強いこと）が明らかとなり仮説が支持される結果となった。個人差として錯視量の大きな人は、それだけ化粧の効果を実感できるため、化粧をより熱心に行う傾向がある可能性がある。

実験Ⅱでは、アイメイクは目の外周のみならず目の内部においても過大錯視を起こす、という仮説を検証した。実験Ⅰで用いた化粧顔画像に加え、黒目の上下に重点的にアイラインを施した画像を標準刺激、ノーメイク顔画像の黒目の大きさを变化させた画像を比較刺激に用い、化粧顔の黒目がどの程度大きく見えるかを調べた。するとすべての化粧顔画像において黒目の過大視が認められ、仮説が支持される結果となった。アイメイクのうち黒目に近い部分が外円の役割を果たし、黒目が内円の役割を果たすことでデルブーフ錯視が引き起こされたと考えられる。しかし、本実験では目の大きさ錯視と黒目の大きさ錯視の厳密な相関関係を測定できなかったため、今後の研究の課題となる。

実験Ⅲでは、目頭と目尻に伸ばしたアイラインにより目が横に大きく見えるという仮説を検証した。目頭・目尻ラインを長さや角度に変化をつけて施した化粧顔画像を標準刺激、ノーメイク顔の目の横の大きさを变化させた画像を比較刺激に用い、化粧顔の目の横の大きさがどの程度大きく見えるかを調べた。するとすべての化粧顔錯視において目の横の大きさ錯視が認められ、仮説が支持される結果となった。白目の両端を結んだ線をミュラー・リヤー錯視の主線と捉えると、目頭と目尻に伸ばしたアイラインが矢羽の役割を果たし、それにより目の外周を横に大きく知覚させたと考えられる。

3つの実験を通して、化粧錯視にまつわる様々な幾何学的錯視のメカニズムが明らかとなった。同化や対比など、様々な錯視効果が複雑に絡み合うことでアイメイクによる錯視は生じている。これらをふまえ、今後の研究の課題として、幾何学的錯視についての実験参加者の個人差が及ぼす化粧錯視への影響が挙げられる。デルブーフ錯視やミュラー・リヤー錯視による効果を大きく受ける人は、より化粧錯視の効果も大きく受けるのではないだろうか。こうした仮説を検証することにより、本実験で明らかとなった化粧に対するこだわりといった個人差に加えて、どのような要素が各々の錯視量の変化に影響を及ぼすのかが明らかとなるだろう。（基礎心理学）